

かささぎ

通信 第107号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2021年 10月 8日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年九月の「森三郎の作品を読む会」では先月に続いて『赤い鳥』のコラム「昔の笑話」を読みました。

森三郎は『赤い鳥』のコラム他の笑話を単行本にまとめた『昔の笑ひばなし』（一九四二年、中央公論社）の「あとがき」で、江戸時代の小咄（こぼなし）本の中から「皆さんを健康な笑ひにみちびく作品ばかり選りすぐって、みなさんによく分かるやうに書きなほしたつもりです」と書いています。

しかし読んでみてもなかなか面白さが分からないものも多くありました。その理由は主に、文化の違いと私たち読み手の知識の無さによるものでした。キセルや煙草の話などは森三郎の書いた時代の子どもたちにも分からなかったかもしれせん。

▽「やれく、何がこまるといつて、煙草入をわすれたらら、こまることはありません。あなたのお煙草がやはらかかつたら二三服くださいまし。」「いゝえ、私のは、きつうございませす。」「ぢやア、五六服下さいまし。」「一九三四年九月号 p.75)

遠慮がちに言い出したのに厚かましく欲張ったことを言い出したのだろうと、想像するだけでした。

▽「八助や、隣の本屋へいつて、ちよつと「江戸かぐみ」をかりて来ておくれ。」「八助本屋へいつて「おそれ入りますが、江戸かぐみをおかしなさつて下さいまし。」「はいはい、何をおしらべになりますか。」「いゝえ、大方、ひげでもそののでございませう。」「（一九三四年六月号 p.36）（「」は原文のママ）

「江戸かぐみ」が『江戸鑑』（江戸時代の大名・旗本などの名鑑）だということが分からないと八助と同じことになりそうです。私たちも実物は国立国会図書館デジタルコレクションで確認しました。

▽しつたふりをする男が道を歩いてゐますと、友だち二人が往來のまん中で口げんかをしてゐました。男、二人の間へ入つて、「これこれ、二人とも、なぜ人にまけてやらない。男に生れて、堪忍の二字を忘れてどうなるもんか。むかし菅丞相といふ人は千人の股をくぐつたことさへある。」「（一九三四年六月号 p.45)

後から調べて「韓信（漢の高祖劉邦の功臣）の股潜り」という逸話を知り、「カン」の音から「菅丞相（菅原道真）」と間違えて知つたふりをしたのだと分かりました。これではすぐには笑えませんでした。

森三郎は『昔の笑ひばなし』の「あとがき」で「無筆」の話が多いことを特徴に上げています。それも子どものことではなく、大人の話です。しかし、耳で聞く情報は随分多いし、文字にしても、漢字は解らなくても、ひらがなはよく解つています。先ほどの「堪忍」という言葉でも、漢字二字かひらがな四字かで話がかみ合わない笑い話があり、森三郎に「かんにんの四字の笑話」という『雲萍雜志（うんぴょうざつし）』の話があります（『森三郎三著作集』第十二巻 p.360-365）。

「読む会」当日も文字に関する話が広がり、子どもたちが新聞記事から「の字探し」をするゲームに盛り上がるという話が紹介されました。森三郎も四、五歳の頃母親に先ず「の」の字を教わり、手許の本の中の「の」の字を探して喜んで書いています（『森三郎三著作集』続編第十四巻「小学生時代に読んだ本」p.46）。三郎も同じ様に文字を覚えて本の好きな少年になったのでしよう。

三郎は前掲書「あとがき」で、素朴な伝統的遊戯にだけ生きていた子供たちに比べて、現在のありがたさを言っています。しかし三郎の書いた時から八十年を経ました。「物のあふれ過ぎている現代にはない、その時代の心の豊かさを感じる」という参加者の言葉に皆で納得して、この『赤い鳥』のコラム「昔の笑話」を読み終えました。

次回「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年十一月十二日（金）午後一時半～三時半 実施予定

少国民文芸選『かささぎ物語』（帝国協会出版部） 続き